

「バーニー みんなが愛した殺人者」

★★★★

2013（平成25）年5月24日鑑賞<GAGA試写室>

監督・脚本・製作：リチャード・リンクレイター
バーニー・ティーディ（葬儀社の助手）／ジャック・ブラック
マージョリー・ニュージェント（莫大な財産を相続した未亡人）／シャーリー・マクレーン
ダニー・バック・デヴィッドソン（地方検事）／マシュー・マコノヒー
スクラッピー・ホームズ／ブレイディ・コールマン
ロイド・ホーンバックル／リチャード・ロビショール
ドン・レゲット／リック・ダイアル
ハッカビー保安官／ブランドン・スミス
ウッドワード牧師／ラリー・ジャック・ドットソン
モリー／メリリー・マコーマス
カール／マシュー・グリア

2011年・アメリカ映画・99分

配給／トランスフォーマー

<ネタは面白いが、このつくり方はちょっと・・・>

本作は1996年11月16日にテキサス州東部にある小さな田舎町カーセージで実際に起きた、39歳の町一番の人気者バーニー・ティーディが81歳の町一番の嫌われ者マージョリー・ニュージェントを殺害した事件にもとづくもの。1998年12月、スキップ・ホランズワースによる「テキサス・マンスリー」誌に掲載されたこの事件の記事に惹きつけられ、何かひらめいたリチャード・リンクレイター監督は、カーセージの人々へのインタビューを中心として本作を監督・脚本・製作した。

シリアスな問題提起型ドキュメンタリー映画にするのなら、①被害者のマージョリーは死亡しているから直接そのインタビューを行うことは不可能だが、②収監中のバーニー、③地方検事のダニー、④陪審員や裁判官たちを徹底的に取材することも可能。しかし、リチャード・リンクレイター監督はあえてそんな方法を取らず、圧倒的にバーニー側に立ち、「彼は何も悪いことはしておらず、罰を受ける必要などない」と思っているカーセージの住民たちのインタビューを中心に本作を監督した。目撃者の一人が言う「みんなが言うほど悪いことじゃないわ。彼はたった4発撃っただけ。5発じゃない」との言葉は印象的だ。たしかにシャーリー・マクレーン演ずるマージョリーのような「クソババア」は早く死んだ方が良かったのかもしれないが、それはあくまでカーセージの住民たちの意見。現実には12人の陪審員は「有罪」の評決を下し、終身刑の言い渡しを受けたバーニーは、現在も服役中らしい。圧倒的なカーセージの住民の支持(?)にもかかわらず、バーニーはなぜ有罪に？

バーニーを演じた小太り(?)の俳優ジャック・ブラックの熱演が光る本作は、このユニークな構成が批評家たちの大絶賛を受けて全米で大ヒットしたらしい。たしかにネタは面白いが、私の目にはこのつくり方はちょっと・・・。

<ダニー検事は、なぜしゃかりきに？>

『評決のとき』(96年)では正義感あふれる一途な弁護士を演じ、『リンカーン弁護士』(11年)では一転してチョイ悪弁護士を演じた(『シネマルーム29』178頁参照)マシュー・マコノヒーは弁護士志望だったそうだが、本作では地方検事ダニー・バック・デヴィッドソン役を軽妙に演じている。地方検事のダニーに対して「バーニーを無罪にすべきと強く訴える者も少なくなかった」という事態の中、テキサス州では公正な裁判が期待できないとして、裁判地をサンオーガスティン郡に変更したそうだが、バーニーを第一級殺人罪で起訴したダニーは本作で見ると、なぜかしゃかりきにバーニーをワルものに仕立て上げようとしている。

しかし、検事だって被告人の情状を酌量すべき義務があるのは当然だから、バーニーを実際よりも凶悪な殺人犯に仕立てあげようとするのはいかがなもの？私はその思うのだが、なぜダニーはそこまでしゃかりきに？それはどうも、さし迫った再選にこの事件を利用しようとしたためらしい。そうだとすると、陪審員や裁判官は、ひょっとしてそれに乗せられて(?)誤った判断を・・・？

<弁護人の弁護方針は？私なら・・・>

私は弁護士として本作の法廷シーンに大いに期待していたが、カーセージの住民たちのインタビューを中心につくられた本作では法廷シーンはほとんど登場しないし、検事と弁護人の丁々発止のやりとりもゼロ。弁護人による最終弁論のシーンは登場するが、これもホンの形だけのもので無内容だ。これでは・・・？

私がバーニーの弁護人なら、ガレージに置かれた22口径のライフルでマージョリーを背後から4発撃って殺害したことは認めざるをえないし、心神喪失による無罪の主張はムリだが、心神耗弱の主張はしっかり展開したい。もし本作に描かれているようなバーニーに対するマージョリーのひどい仕打ちが立証できれば、神経衰弱による心神耗弱の主張が認められる可能性は十分ある。また、情状面においても、①マージョリーが周りの人たちにいかにも理不尽な行動をとってきたかを立証することによって、バーニーに対する仕打ちの苛酷さを強調し、②バーニーが仕事面において有能であっただけでなく、人間関係においていかにもすばらしい人物であったか、したがってバーニーの刑は情状酌量すべきことについて多くのカーセージの住民たちに嘆願書を書いてもらえば、バーニーが執行猶予になる可能性は十分にある。さらにバーニーの刑事弁護人を務めるなら、バーニーがマージョリーの代理人として多額の金を社会のために使ったことの意義をしっかりと強調するとともに、民事事件で相続人からその返還請求訴訟がなされた場合、それに積極的に対応・反論することが不可欠だ。ところが、本作ではそんなバーニーの弁護人の努力が全く見えないから、私はイライラ。私が刑事の弁護人兼民事の代理人なら・・・。

<バーニーとマージョリーとの関係は？>

バーニーがマージョリーと知り合ったのは、石油で莫大な財産を築いたマージョリーの夫ドゥエイン・ニュージェントの葬儀をバーニーが担当したのがきっかけ。州立大学で葬儀学の準学士号を取得したバーニーは、肉親を亡くした遺族への配慮と気遣い、美しく繊細な遺体処理、よどみない葬儀の進行と演出、賛美歌の演奏、棺桶を売り込む営業力まで、すべての仕事ぶりが完璧で、葬儀のプロとして高く評価されていた。そのうえ、町の美化運動を推進したり、短大の演劇部で音楽監督を務めるなど市民活動への取り組みも献身的だったから、ドゥエインの葬儀を担当した当時、カーセージでのバーニーの人気はものすごかったらしい。

それに対して、マージョリーは高慢なうえ頑固でわがままな性格で、友達は一人もおらず、息子家族とも裁判沙汰になっていたらしい。バーニーはそんなマージョリーですら大いに気遣い慰めたから、バーニーがマージョリーに気に入られたのは当然。その結果、今やバーニーは葬儀社を辞め、マージョリー専属のマネージャーとして彼女の所有する会社の社員となり、彼女の家に住み込んで株式投資や銀行預金の管理まで任されるようになっていたが、さてそのことの是非は？一緒に豪華な海外旅行に出かけたり、家に住み込んでマージョリーの身の回りすべての世話をするようになると、ひょっとしてバーニーとマージョリーの間には男女関係が？そんな風に考える人もいたようだが、さすがにそれは・・・？

<相続人たちはいかなる行動を？その描き方がイマイチ>

マージョリーは現実には、息子に与えていた相続権を剥奪し、1,000万ドルに及ぶ資産の全てをバーニーに相続させる手続を取っていたそうだが、本作ではそこらの相続をめぐる法的処理の説明が不十分どころが弁護士の私には大いに不満。日本では、相続人に対する相続欠格の認定は難しい。また、いくら遺言で相続人には全く相続させず、すべてをバーニーに相続させると書いても、相続人は遺留分侵害の主張をすることができる。また、本気でバーニーに相続させるつもりならバーニーを養子にすることも可能だが、マージョリーはそれをしていない。

マージョリーの死亡が確認されたのは、9カ月間誰もマージョリーの姿を見たことがない事態を不審に思った投資管理会社の担当者が地方検事ダニーに通報し、ダニーが家宅捜索を行った結果だということから驚きだ。その間バーニーはマージョリーが誰とも会いたがらないと言ってすべての面会を拒絶し、それまでと全く変わらない生活を続けていたが、マージョリーの偏屈さを知っている町の人々は、バーニーのそんな説明に何の疑いも持たなかったらしい。そして、以前より自由にマージョリーの金を使えるようになったバーニーは、教会をはじめ町の施設や困っている人たちに資金を提供したから、マージョリーの財産はより有効に活用・・・？

他方、マージョリーの死体が発見された時、実際は彼女の死体は白いシートにくるまれていたらしいが、本作に見る冷蔵庫の中での保管方法はあまりにも猟奇的だから、この描写は事実をねじ曲げているといわざるをえない。マージョリーの死亡を知った相続人たちは、バーニーがマージョリーの代理人として費消した財産を返せと請求したそうだが、本作ではそこらの描き方が不十分だから、その点でも私はイライラ・・・。

<本作は『罪と罰』の現代版？>

ドストエフスキーの名作『罪と罰』におけるラスコーリニコフは、「一つの微細な罪悪は百の善行に償われる」「選ばれた非凡人は、新たな世の中の成長のためなら、社会道徳を踏み外す権利を持つ」という独自の哲学の下に計画的に金貸しの強欲狡猾な老婆を殺害し、奪った金で世の中のために善行をしようと企てた。しかし、バーニーがライフルでマージョリーを射殺したのは、それとは全く違う動機と態度だ。

バーニーがマージョリーを殺したのは、長年のマージョリーからの虐待による神経衰弱と一時的な心神耗弱状態での偶発的な犯罪。また、『罪と罰』におけるラスコーリニコフは奪った金を世のために使うことはできなかったが、バーニーの場合はマージョリー殺害後9カ月もの間、莫大な財産を世のため人のために使っているうえ、自分のためにはピター文使っていない。さらに、『罪と罰』では老婆殺しを追及する予審判事ボルフィーリィとラスコーリニコフとの間で展開される「論戦」がハイライトだが、バーニーは逮捕後すぐに犯行を自供しているし、自分が神様の教えに反する行動をしてしまったと深く反省している。

このように考えると、『罪と罰』に見る老婆殺しと本作に見るマージョリー殺しは同じ老婆殺人事件がテーマだが、「正当化された殺人」の是非が大きな論点だった『罪と罰』に対し、そういう論点のない本作は、『罪と罰』の現代版とは到底言えないのでは・・・？